人間のままでいるために　ハン・ガンさん受賞講演、問いの中で生きる

ノーベル文学賞の受賞を前に、受賞記念講演をしたハン・ガンさん＝AP

ノーベル文学賞の受賞を前に、受賞記念講演をしたハン・ガンさん＝AP

「世界はどうしてこんなに暴力的で苦しいのか」「同時に、世界はどうしてこんなに美しいのか」――。今年のノーベル文学賞に決まった韓国の作家、ハン・ガンさん（54）が 7 日夕（日本時間 8 日未明）、ストックホルムで受賞記念講演を行い、自身を執筆に駆り立ててきた「動力」は「**この二つの問いの間の緊張と内的な闘争**」だったと語った。

言語の糸でつながる命

「愛ってなんだろう？　私たちの胸と胸を結んでくれる金の糸だよ」

「光と糸」と題した講演で、ハン・ガンさんは 8 歳の時に書いたこんな詩を起点とする、自身の文学的な歩みを振り返った。

ハンさんは 1970 年、韓国南西部の光州で生まれた。家族と共に光州から引っ越してまもない 80 年、戒厳令下で光州事件が起き、民主化を求める市民や学生が武力弾圧された。

12 歳の時、起きた出来事を証拠として残すために秘密裏に制作された**「光州アルバム」という冊子を、大人たちに内緒で読んだ**という。殺害された人々の写真とともに、献血のために大学病院に並ぶ人々の写真もあり、「人間は人間にこんな行動をするのか」という疑問が刻み込まれた。

「人間に対する根源的な信頼を失ったが、どうしたら世界を抱きしめることができるのか。その不可能な謎に向き合わなければ前に進めない」と、書き始めたのが、代表作の一つで光州事件をテーマとした**「少年が来る」（2014 年）**だった。

肉食を拒否し、日に日にやせ細っていく女性を描いた**「菜食主義者」（07 年）**は、**「私たちはどれほど深く暴力を拒否できるか」**という問いから生まれた。済州島の島民が数多く虐殺された 1948 年の済州島 4・3 事件をテーマとする**最新作「別れを告げない」（21 年）**を書いた時には、**「私たちはどれだけ愛せるか。どこまでが限界か。どれだけ愛すれば私たちは人間のままでいられるか」**という問いの中にいた。

一つの長編小説を書くたびに、自身のたてた「問いに耐えながら、その中で生きる」といい、一つの問いが終わりに近づき小説が完成すると、「次の問いが鎖のように、またはドミノのように重なって続き、新しい小説を書き始める」のだと語った。

30 分あまりに及んだ講演を、ハンさんは静かな声でこう結んだ。

「私は温かい血が流れる体を持つ私が感じる生々しい感覚を電流のように文章に吹き込もうとし、その電流が読む人に伝わると感じる時には驚き、感動する。**言語が私たちをつなぐ糸**だということを、**生命の光と電流が流れるその糸に、私の問いがつながっているという事実を実感する瞬間**に。**その糸につながってくれるすべての方々に感謝**する」

「光州」は現在形

「少年が来る」を翻訳した井手俊作さんは、講演を見て、「作品ごとに問いを重ね、突き詰めていく。文学に対する真摯（しんし）な態度を改めて感じた」と話す。

何よりも印象に残ったのは、ハンさんが「人間の残酷性と尊厳が極限の形態で同時に存在していた**時空間を光州と呼ぶ**とき、**光州**はもはや一都市を示す固有名詞ではなく、普通名詞になる」と語ったことだ。ハンさんは、**光州事件とは「時間と空間を超えて継続的に私たちに戻ってくる現在形」だ**として、**「過去が現在を助けている。死んだ者たちが生きている者を救っている」**と感じたとも話した。

韓国では今月 3 日に、尹錫悦（ユンソンニョル）大統領が非常戒厳を宣布。解除後も混乱が続く。井手さん自身、戒厳令に反対する市民が国会に駆けつける様子をニュースで見て「死を迎えた無辜（むこ）の人々の魂が現在の人々を助けようとしているような、亡くなった『少年』が帰ってきているような感覚」を持ったという。

「『光州事件』は今、韓国でも世界でも生まれ続けている。ハン・ガンさんは、時間や空間を貫通するまなざしであらゆる虐殺から目をそらさない。繊細な皮膚感覚と言語感覚を持ちながら、厳しい問いに立ち向かい続ける強靭さを併せ持つ稀有な作家だ」（守真弓）